

Title	フィリップ・ラーキン "The Old Fools" 考
Author(s)	白川, 計子
Citation	Osaka Literary Review. 31 P.110-P.117
Issue Date	1992-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25465
DOI	10.18910/25465
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

フィリップ・ラーキン “The Old Fools” 考

白川 計子

I can think of one or two poets who are very clever intellectually, and who are trying to integrate all sorts of influences, but they don't make it emotionally. And poetry is a matter of emotion. . . .¹⁾

我々は生活の中で、日々、様々な感情におそわれている。単一の感情である場合はまれで意識の流れのごとく感情も流れ変化し、捕らえがたく移り変わる。一つの詩が描きうるものが単一の強烈な感情である場合もあるが、感情のヒロイズムを許さないフィリップ・ラーキンのような詩人は、われわれの日常の感情体験に似た、微妙な交錯する感情のグラデーションを、制御された日常のレベルの言葉で捕らえる。彼の詩の描くものが、かくも陰うつで虚無的であるにもかかわらず一般読者を魅了してやまないのはこの点にある。ラーキンは我々が日常のなかで取り逃がし、しっかりと確認しえないでいる感情体験を力強い正確さで喚起する。

本論ではラーキンの詩が、どのように、日常の微妙な感情を伝えているか、そして、それがいかに我々にとって真実であるかを検証するために、最後の詩集 *High Windows* の中から “the darkest, most death-oriented”²⁾ “most desolating. . . chilling and comfortless”³⁾ “bleak and sinister”⁴⁾ と評される “The Old Fools” を読んでみる。

この詩は年老いてばけた人々への苦々しい侮蔑の言葉から始まる。

What do they think has happened, the old fools,
To make them like this? Do they somehow suppose
It's more grown-up when your mouth hangs open and drools.
And you keep on pissing yourself, and can't remember

Who called this morning?

(何が起こったと思っているのか、老いぼれどもよ、
こんなざまにされて。奴らは人が口をだらりと開けて
よだれをたらすようになったらもっと一人前とでも思っているのか。
そして小便を垂れ流し、今朝訪ねてきたのが誰かも
思いだせなくなるってことが。)

彼らに投げ付けられる old fools という罵りの言葉はまず怒りの感情を伝える。この怒りは、詩人の怒りというより、我々の心にある、老いというものに対する人間の怒りである。そして彼らの肉体的、精神的な恥辱の状態が容赦なく呈示される。苦々しい老いの現実のあと、疑問詞で始まった詩はその感情を深めていく。

Or that, if they only chose,
They could alter things back to when they danced all night,
Or went to their wedding, or sloped arms some September?
Or do they fancy there's really been no change,
And they've always behaved as if they were crippled or tight,
Or sat through days of thin continuous dreaming
Watching light move? If they don't (and they can't), it's strange:
Why are't they screaming?

(それとも、そうしようと思えば、
事を昔に戻せると思っているのか、一晩中踊り明かしたあの時、
結婚式にむかったあの時、いつかの九月の担い銃の時に。
それとも、ほんとは何も変わっていないと思っているのか、
そしてずっとこうしてびっこかよっぱらいのようにしてきたとでも、
来る日も来る日も途切れのない浅い夢を見ながら、座って
光の動きを見ていたと思っているのか。そう思っていないとしたら（思
えっこない）おかしいじゃないか。

なぜ奴らは大声で泣き叫ばないのか。)

ラーキンはここで彼らの生きた過去を凝縮して描く。そのダンスと結婚式と
出兵という人生の華々しい瞬間⁵⁾ は、彼らの今の肉体的、精神的衰退の様

(crippled, tight, sat through days, thin continuous dreaming) を対照的に浮かび上がらせる。生の「動」から死の「静」への移行だ。そして次の簡潔な三語、“watching light move” も、部屋の中にじっと座って窓からさす日の光の移ろいゆくのを見つめる彼らの姿を伝えると同時に、動くものと静止するものという対照を巧みに組み込んでいる。この対照ゆえに彼らは哀れであり、いらだたしいのだ。この惨めな剥奪された状態にあって、彼らはなぜ叫ばないのか。この疑問がこの詩の出発点となり、次の第二スタンザの、死についての思索を導入する。

“At death, you break up: the bits that were you / Start speeding away from each other for ever / With no one to see. It’s only oblivion, true.” (死ぬとき、君は壊れる。君だったかけらは／永遠に飛び散って／誰にも見えなくなる。それはただの忘却、そうだ。) この第二スタンザの冒頭の人称の変化は重要である。この“you” は、巧妙な使われかたをしている。“we” でなく“you” であるために、これは人一般を指していると同時に、第一スタンザのつながりから“old fools” に向けられているという印象を残し、また読者への呼び掛けとも響く。“they” が“you” に置き換えられることによって、第三者であったばけ老人たちは我々の一員に組み込まれ、読者は彼らの惨めさを共有する者となり、そして死は彼らのみならず我々の生にも同居していることを顧みねばならない。“(oblivion)... was all the time merging with a unique endeavour / To bring to bloom the million-petalled flower / Of being here.” (ここに在りと／無数のはなびらをつけた花を咲かせようと／必死に頑張ってみてもいつだってそれは共にあった) そしてこのスタンザの最後は再び彼らに向けられた疑問文に戻る。“Their looks show that they are for it: / Ash hair, toad hands, prune face dried into lines — / How can they ignore it?” (奴らを見ると苦労してきたのがわかる。／灰色の髪、ひき蛙の手、干からびてしわ寄った間抜けな顔 — / 奴らはそれをどうして無視できるのか。) 第一スタンザの“Why aren’t they screaming?” も、この“How can they ignore it?” も、純粹な疑問というより、人がぼけ

た老人を見るとき引き起こされるかすかな驚きといらだちの感情を伝えて
 いる。彼らの自らの惨めさにたいする認識の無さへの驚きと、彼らによって死
 の存在を見せ付けられねばならないいらだちの感情である。そして次の第三
 スタンザでは、この我々の驚きといらだちに答えることも反論することもな
 い彼らの頭の中を詩人は想像する。

このスタンザは第一スタンザと正反対の美しいイメージで語られ、読者の
 心を打つ。

Perhaps being old is having lighted rooms
 Inside your head, and people in them, acting.
 People you know, yet can't quite name; each looms
 Like a deep loss restored, from known doors turning,
 Setting down a lamp, smiling from a stair, extracting
 A known book from the shelves; or sometimes only
 The rooms themselves, chairs and a fire burning,
 The blown bush at the window, or the sun's
 Faint friendliness on the wall some lonely
 Rain-ceased midsummer evening.

(たぶん年をとるということは頭の中に明かりの灯った
 部屋をもつことだ。そしてその部屋には人がいて、動いている。
 君の知っている人達、だが名前はどうもわからない。深い痛手が
 治るみたいにその人達がぼうっと現れる、よく知ってるドアが開いて
 ランプを置いて、階段からほほ笑みかけて、本棚から
 君の知ってる本を取り出す。あるいは時にはただ
 部屋だけが現れる、椅子や燃える暖炉や
 窓の外の風に吹かれる茂みが。あるいはかべの
 淡い親しげな陽光、いつかの一人ぼっちの
 雨上がりの夏の夕暮れ時の。)

光、ほほ笑み、暖炉、木、風、日、雨、夏といった肯定的なイメージに溢
 れるこのスタンザは否定しがたい静かな美しさを持つ。“It is Larkin's most
 handsome stanza, and it encloses perhaps the most beautifully realised

and affecting sequence in all his work.”⁶⁾ と評されるスタンザである。ここで読者は、第一、第二スタンザでたどった老人に対する冷笑もいらだちも鎮静し、穏やかな好感と哀感を味わうことになる。ラーキンの詩にはこの生に対する押さえがたい愛着がしばしば潜んでいる。第二スタンザの “to bloom the million petalled flower / Of being here” も生のメタファーとして強烈な美しさを持っている。彼の最もすぐれた詩において、その否定的な主題にもかかわらず、荒涼とした殺伐さから読者が救われるのは、この生への憧憬が、詩の意味の流れをせき止めることのない情緒の形で伝えられるからである。

最終スタンザは再び彼らを “the old fools” と呼び、死がどのように彼らに接近するかを歌う。

... the rooms grow farther, leaving
 Incompetent cold, the constant wear and tear
 Of taken breath, and them crouching below
 Extinction's alp, the old fools, never perceiving
 How near it is. This must be what keeps them quiet:
 The peak that stays in view wherever we go
 For them is rising ground.

(その部屋はどんどん遠ざかり、その後は
 身が凍える寒さとなり、呼吸するだけで着実に
 消耗していくのだ。そして消滅の山頂の下で奴らは
 うずくまり、老いぼれどもよ、どれほどそれが近いのか
 けして気付かない。だからこそ奴らは静かにしていられるのだ。
 僕らにはどこに行こうと視界にはいるその頂も
 奴らには上り坂の地面なのだ。

この “Extinction's alp” は死の巧みなメタファーである。山頂は下界（この世）から遠ざかり、寒くて体がつめたくなり、大気は薄く呼吸が困難になる場所だ。彼らは今この消滅の山頂の近くでうずくまって凍え、息をするにも苦しんでいる。（死を迎える時の肉体感覚でもある。）死はラーキンにとっ

て後にも先にも何もない消滅である。彼にとって不可思議なのはその消滅と消滅の間にあるつかの間の生である。すなわち、生きている間に人間が必死で何かを作り上げようとするその行為自体が不可思議なのである。そして死という消滅を無視し続けられる人間の能力は驚異なのだ。この意味で、ぼけた老人のこの能力は我々が実は持ち続けていた能力にはかならない。死が常に山の頂のように我々の視界にあったとしても我々はそれを近くには感じないで生きる。そしてその山頂に近付いたら、この老人たちのように、その頂上を見失い死の現実もわからなくなる。

この詩の最後は疑問文の繰り返しあと、肯定文で締めくくられる。

Can they never tell

What is dragging them back, and how it will end? Not at night?

Not when the strangers come? Never, throughout

The whole hedious inverted childhood? Well,

We shall find out.

(奴らには決してわからないのだろうか、
何が奴らを引きずり戻し、それがどのように終わるのか。夜中では
ないだろうか、
あの見知らぬ人達が来たときではないだろうか。そのぞっとする
逆戻りの子供時代の間には決してないのだろうか。まあ、
僕らもいずれわかるさ。

“We shall find out.” 詩の全体を通して “they” と “you” と “we” が巧みに入れ替わり、最後の “we” で、部外者として見てきたぼけ老人の世界が完全に我々のものと重なることになる。彼らに投げ付けられていた疑問は、モノシラブルのこの四語で肩をそびやかすようにきりあげられる。ここには解決も救済もない。疑問の容認があるだけだ。生と死という根源的な最も大きな疑問は決して解かれることなく、我々は生き続け消滅するのだ。

ラーキンは死について次のように言う。

Man's most remarkable talent is for ignoring death. For once the certainty of permanent extinction is realised, only a more immediate calamity can dislodge it from the mind, and then only temporarily... Truly, as Anatole France said, ignorance — in the sense of ignoring — is the necessary condition of life itself.⁷⁾

しかし我々がこの詩の中に見るものはこの「思想」ではない。この「思想」を包んでいる感情である。我々は、我々のよく知っている感情をこの詩に喚起される。それは嫌悪と憤りと哀れみと共感と諦めといった日常の感情体験であり、ラーキンは見事にそれらをこの詩の中に捕らえ得ているのである。

老いと死の問題は初期の詩集から終始ラーキンの詩の中心的主題であった。代表的なものを挙げると詩集 *The Less Deceived* では “Next, Please”、“Going”、“Wants” が、*The Whitsun Weddings* では “Nothing To Be Said”、“Ambulances” がそれである。しかしこれらの詩においては死はあくまでも比喩的に、あるいは思索的に語られていた。それは、黒い帆の舟であったり (“Next Please”)、野を包む夕暮れであったり (“Going”) 救急車の到来であったり (“Ambulances”)、また、あらゆる生の営みは「死から目をそらすこと」 (“Wants”) 「生きることはゆっくりと死んでいくこと」 (“Nothing To Be Said”) と表現されるように、老いと死は生の陰に隠れた唯一の真実として論理的に歌われてきた。しかし、この最後の詩集 *High Windows* にいたって始めて老いと死は、ぼけ老人という具体的な相関物をもって歌われたと言えるだろう。

注

- 1) Philip Larkin, “A Conversation with Philip Larkin”, *Tracks* No. 1, Summer 1967. [*An Enormous Yes in Memoriam Philip Larkin 1922-1985*, ed. Harry Chambers (Cornwall : Peterloo, 1987), p.58 より引用。]
- 2) William H. Pritchard, “Larkin's Presence”, *Philip Larkin : The Man and His Work*, ed. Dale Salwak (London : Macmillan, 1989), p.83.

- 3) Alan Brownjohn, *Philip Larkin* (Essex : Longman, 1975), p.20.
- 4) Janice Rossen, *Philip Larkin : His Life's Work* (Hertfordshire : Harvester Wheatsheaf, 1989), p.141.
- 5) ダンス、結婚式、出兵は、ラーキンがそれぞれ別の詩において歌っている主題である。ダンスは “Reasons for Attendance”、結婚式は “The Whitsun Weddings”、出兵は “MCMXIV” を参照頂きたい。
- 6) Pritchard, pp.84-85.
- 7) Philip Larkin, “Point of No Return” *The Observer*, 24th April 1983. [Chambers, p.61 より引用。]

詩の引用は *Philip Larkin : Collected Poems*, ed. Anthony Thwaite, (London : Faber, 1988) による。